

1. 序論

1. 題名について

レポートの題名が白い白馬になっており、これは中学生の作文でも訂正されるような間違いであり、解釈に困るような状況である。そのため、医学総論IIIオリエンテーションのスライド資料の「医師としての職業を通じての社会貢献という考え方」のページを参考に、この題名を考えた人間が一体何がしたいと考えているのかについて推察する必要がある。

2. 「医師という職業を通じての社会貢献という考え方」

標記の~~スライド~~スライドでは、4つの項目が列挙されている：「医学部での学習は、医師になるためのものであることは理解しているが、医師という職業を通じて自分が社会貢献や他者貢献するという意識が十分育っていない。」「自分が就く職業が社会でどのように役立つのか?」「医学部で学んだ知識と技能をどのように使うべきなのか?」「自分の職業と社会の人々の関係は? 職責と幸せは?」以下で検討していく。

「医学部での学習は、医師になるためのものであることは理解しているが、医師という職業を通じて自分が社会貢献や他者貢献するという意識が十分育っていない。」この文は、明示されていないため想像に頼るしかないが、おそらく前学年までのレポート等についての所見であろう。前段の「医学部での学習は、医師になるためのものであることは理解しているが、」は、医学部看護学科の存在を無視しているが、2年時の医学総論IIのレポート「医師になるために必要な能力」等、医学総論IIでのリアクションペーパーを踏まえての記述であると推察できる。その上で、後段「医師という職業を通じて自分が社会貢献や他者貢献するという意識が十分育っていない。」と結論している。もし仮に「医師になるために必要な能力」等での評価を踏まえての記述であることが正しいのならば、なぜ「医師という職業を通じて自分が社会貢献や他者貢献するという意識が十分育っていない。」という評価に至ったかという点は不思議である。問われていないのに言及しないのは当然である。何らかの推察が行われたのだろうか。

次の3項目であるが、これが何故「医学部での学習は、医師になるためのものであることは理解しているが、医師という職業を通じて自分が社会貢献や他者貢献するという意識が十分育っていない。」と並列で挙げられているかがわからない。並列として掲げるならば、これもレポート等への所見であるはずである。しかし、疑問形の文章になっており、所見としては考えにくい。以下の3項目に関しては疑問文であり、これらは並列であることはあり得るが、第1項目のみ平叙文でありこれだけ別物と考えるしかない。つまり、ここでは、他になんともできないというやむを得ない事情から、非明示的に行われた論理関係の変更を恣意的に推理して、「自分が就く職業が社会でどのように役立つのか?」「医学部で学んだ知識と技能をどのように使うべきなのか?」「自分の職業と社会の人々の関係は? 職責と幸せは?」のみ並列で考えることとする。

さて、「自分が就く職業が社会でどのように役立つのか?」「医学部で学んだ知識と技能をどのように使うべきなのか?」「自分の職業と社会の人々の関係は? 職責と幸せは?」の3項目では、意味からしておそらくこれが題名の「自身の医師としてのDoctor's Role in the Future」と関連するものだと考えることができる。例の題名についてのレポートのリサーチクエスチョンの候補のようなものなのかもしれない。ここに至ってよう

やく本レポートのリサーチクエストについて考えることができる。「自身の医師としてのDoctor's Role in the Future」との関連が最も深いであろう「自分が就く職業が社会でどのように役立つのか？」について考えるのは妥当である。ただし、言うまでもないが、社会貢献とは社会「の」役に立つことであり[1]、社会「で」役に立つことは別物である。タイトルと内容にズレがあり、ここでも解釈に困る。社会「の」役に立つことは曖昧で複雑であり、レポートの内容としては過大なタスクである。ここでは社会「で」役に立つことについて考えることが妥当であると考え。

3. リサーチクエスト

RQ

以下、本レポートでは「自分が就く職業が社会でどのように役立つのか？」に関連して、医師が社会でどのように役立つのか？について考察する。題名に含まれる「自身の」や「in the Future」などの言葉との関連ができていないがそもそも意味不明であるのでやむを得ないものとして無視する。

2. 本論：「自分が就く職業が社会でどのように役立つのか？」

1. 「職業」が「社会で役に立つ」というのはどういうことか？

職業とは、厚生労働省編職業分類[2]によれば、「職務・職位・課業によって構成される概念であり、職務の内容である仕事や課せられた責任を遂行するために必要な知識・技能などの共通性又は類似性によってまとめられた一群の職務」である。また、この定義に含まれる概念として続いて、職務とは「一群の職位がその主要な仕事と責任に関して同一である場合、その一群の職位をいう」、職位とは「一人の人に割り当てられた仕事と責任との全体をいう」、課業とは「職位に含まれる各種の仕事のうち、個々のひとまとまりの仕事をいう」、仕事とは「職業活動において特定の活動を果たすために払われる精神的、身体的努力をいう」とされている。

この定義で注目すべきなのは、仕事や責任の発生源については言及していないところである。どのようにしてその仕事や責任が発生したか、が、「自分が就く職業が社会でどのように役立つのか？」の質問の答えそのものである。そこでさらに職業分類を見ると、この分類の性格として「それぞれの職業に対して社会的にどの程度需給があるかを考慮して職業を区分」したものと書かれている。このことから、職業は他者からの需要によって成立することは暗黙に了解されていると考えてよい。すなわち、「職業が社会で役に立つ」とは、ある社会に属する構成員が行うある特定の活動を果たすために払われる精神的・身体的努力が、社会の別の構成員からの需要に応じて行われること、といえる。需要の発生は必要であれば起こらないはずであるので、需要が発生して供給が行われることをここでは建前上「役に立った」とみなす。

また、もう一つ注意しなければいけないのが、上記の定義を見てもわかるように、何らかの団体に属することは、「職業に就く」上では定義に含まれておらず、必須の要件ではない。特定の活動を果たすための精神的・身体的努力を払うことができれば、誰であっても、そしてどこで発生した需要であっても、その需要を満たすことができることが本来望ましい姿であるが、現実的に誰が行ってもその特定の活動を果たすことができるほど規格化された仕事というのは広く見られる現象ではない。

2. 医師の場合

それでは、医学部医学科の学生が就くことが想定されているであろう医師について考える。職業分類[2]によれば「医師の免許を有し、身体各部の疾患・機能障害の診断・治療・手術・研究、保健指導、健康管理、臨床検査、医学的きょう(矯)正保護、医学的鑑識、保険事業に伴う医学的審査、海・空港における出入港検疫などの専門的・技術的な仕事に従

事するものをいう。医師の免許を有する病院長・診療所長を含む。ただし、大学の教授・准教授または講師であって学生等に対する教授および大学付属の病院などで診断・治療などの仕事に従事するもの[198-01]を除く。」となる。本レポートでは「身体各部の疾患・機能障害の診断・治療・手術・研究、保健指導、健康管理、臨床検査、医学的きょう(矯正)保護、医学的鑑識、保険事業に伴う医学的審査、海・空港における出入港検疫などの専門的・技術的な仕事」を医療サービスと呼ぶ。

前節で、ある職業が役に立つとは、発生した需要を満たすことであるとした。需要を発生させる者を通例に従って顧客と呼ぶ、言うまでもなくここで重要なのは需要を発生される者であることで、顧客という単語ではない。職業分類で見る医療サービスの顧客は、最終受益者としての患者の他、保健所や警察署などの公的機関や保険会社が含まれる。これらの顧客が発生させる需要を満たすことが医師が社会で役に立つということになる。前述の通り、需要の発生は必要ない場合起こらないとしているため、「職業が社会で役に立つ」点については、これですべてである。

3. 社会全体の厚生との関係

D(-) 顧客が需要を発生させてそれを満たす、という2者の関係のみで社会「で」役に立つということについては話は終わるが、社会にいるのはこの2者のみではない。具体的に言えば、患者が顧客となって医師が医療サービスを提供する、のみではなく、ここでは代金の7割を負担する公的機関（保険診療の場合）と、そのために社会保険料を納める国民についても考えなければならない。医療サービスに関しては公的な支出によって非常に価格が低く抑えられており、初歩的なミクロ経済学の知識からは過剰に需要が発生していることが予想される。またその値付けに関しても不明瞭であり、検討が必要と思われる。 *good point*

また、責任について言えば、人間には職業社会での責任の他にも家族に対する責任など他の責任を持っていることが普通である。人間一人にできることが有限である以上、他の責任を果たすことを制限すれば、職業での責任を果たすことはより容易にできるようになるが、それは全体として責任を果たしたとは言えない。

つまり、社会「で」役に立つかどうかのみである職業の価値や社会貢献度などを議論するのはあまりに単純化しすぎた話であって、非常に素朴な発想に基づく不完全な議論であるといえる。提供されたサービスは本当に必要とされているのか、受益者は誰なのか、顧客は誰なのか、払いすぎ責いすぎは許容範囲と言えるのかなど、よりまともな議論が必要である。

3. 結論

C 本レポートでは、リサーチクエスチョンとして「医師が社会でどのように役立つのか？」として、[?]について考察した。まず、職業の定義を厚生労働省編職業分類に拠って行い、その上で職業が社会で役に立つとは、社会のある構成員が別の構成員の需要に答えて仕事を行うことであるとした。さらに、この定義に従い、医師が社会で役に立つとは別に定義された医療サービスの需要を満たすことであるとした。また、定めたりサーチクエスチョンの範囲を超えるが、社会で役に立てばよいということはあまりに素朴な発想であり、現実的には様々な問題があることも共に述べた。

参考文献

- R [1] 法務省：社会貢献活動とは、http://www.moj.go.jp/hogo1/soumu/hogo02_kouken01.html, Accessed on 07/28/2021.

[2] 独立行政法人 労働政策研究・研修機構「第4回改訂 厚生労働省編職業分類 職業分類表 改訂の経緯とその内容」、2011年6月、<https://jsite.mhlw.go.jp/fukuoka-roudoukyoku/content/contents/shokugyo04.pdf>, 2021年7月21日閲覧。

レポートの形はできています。
きちんと完成を考えたことも大切です。
ただこのレポートで一歩考えた欲しか、たことは
自身の医師としての役割であり、それはオリエン
テーションでも説明しました。その部分については
大いに問題があります。

IVL [REDACTED]